

# 日本語方言における終助詞の意味・用法と体系

## —富山市方言・山形市方言・共通語の対照—

小西 いずみ

### 1. はじめに

終助詞（文末詞）は、接語（付属語）の付加という手段によって、文法範疇のうち特にモダリティに属す意味を表し分ける機能語群である。先行研究により、終助詞の種類と体系において、全国共通語（以下「共通語」）と諸方言の間、また諸方言間にかなり違いのあることが分かっている。特に1990年代以降、共通語のモダリティ研究の発展を背景に、各地方言話者の内省にもとづく終助詞の記述的研究が展開されてきた。井上優の富山県砺波（井波）方言の記述（井上1995a等）、渋谷勝己の山形市方言の記述（渋谷1999a等）がその嚆矢である。これらの研究では共通語や他方言との対照による記述が一般的であり、渋谷（1999b）、小林（2004：3部2章）、松丸（2006）等、方言間の対照を積極的に行う研究もある。

ただし現状では論者が終助詞の意味・用法について独自の枠組み・用語を用いて記述しており、方言間の異同が分かりにくい<sup>1)</sup>。また、個別の終助詞の記述は蓄積されているが、終助詞の種類と体系についての方言間の異同は明らかでない。本稿ではこうした問題意識にもとづき、終助詞の種類・体系の異同、異なる方言間での終助詞の意味・用法の異同の一端を示す。2節で、文タイプによる専用性と

いう観点から、共通語、富山市方言、山形市方言の終助詞の種類と体系を対照する。3節では、富山市方言の平叙文専用の終助詞ゼ・ジャと山形市方言のジェ・バの意味・用法を対照する<sup>2)</sup>。最後に4節で課題と展望を述べる。その際、3節で個別の終助詞の意味として見出したことが、終助詞の体系全体や、表現志向という問題につながることに触れる。

### 2. 終助詞の種類と体系

終助詞には特定の文タイプに専用の形式と複数の文タイプに汎用の形式とがある。表1に共通語、富山市方言、山形市方言の終助詞を文タイプ別に示す<sup>3)</sup>。(1)～(8)が富山市、(9)～(16)が山形市の例。

- (1) アレ、玄関ニ ダツカ キタ {ゼ／ジャ／??ゾ}。(あれ? 玄関に誰か来たぞ。)
- (2) [同行者に辞去を促す] サ、ソロソロ帰ルゾ。(さあ、そろそろ帰るぞ。)
- (3) [「太郎、遅いね」と言われて] 道 混ソドンガダ {チャ／ワ}。(道が混んでいるんだよ。)
- (4) 午後カラ 雨 フル上。(午後から雨が降るって。)
- (5) 午後カラ 雨 {ダガイ／ダロガイ／ダロゲ}。(午後から雨 {じゃないか／だろうが}。)
- (6) 今カラ ドコ イク {カ／ケ／ヨ／イ

表1. 文タイプの専用・汎用性からみた共通語・富山市方言・山形市方言の終助詞

|       | 共通語                                                                           | 富山市方言                                                                                    | 山形市方言                                                                                |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 平叙文専用 | ワ、ゾ、ゼ                                                                         | ゼ、ジャ、ゾ、チャ、<br>ワ、ガイ、ゲ <sup>注2</sup>                                                       | ジェ、バ、モ                                                                               |
| 疑問文専用 | カ                                                                             | カ、ケ                                                                                      | ガ、ヤ                                                                                  |
| 命令文専用 | なし                                                                            | マ、ヤ                                                                                      | ナ                                                                                    |
| 汎用    | ッテ、ッテバ、サ <sup>†注1</sup> 、<br>ヨ <sup>†</sup> 、イ、ネ <sup>†</sup> 、ナ <sup>†</sup> | ト、チガ、ヨ <sup>†</sup> 、イネ <sup>†</sup> 、<br>ノ <sup>†</sup> 、ネ <sup>†</sup> 、ナ <sup>†</sup> | ズ、ヨ <sup>†</sup> 、ネ <sup>†</sup> 、ナ <sup>†</sup> 、<br>ハ <sup>†</sup> 、ス <sup>†</sup> |

† 間投助詞用法あり  
注1「サ」: 平叙文と疑問文のみ、注2「ゲ」: 推量形にのみ接続

- ネ}。(今どこに行く{か/よ}?)
- (7) ナニ シトンガ。ハヨ コイマ。(何を  
しているの。早く来いよ↓。)
- (8) アシタ ジブンデ 起キラレ{×マ/  
ヤ}。(明日、自分で起きなさいよ↑。)
- (9) A: あした、釣りにでも行こうかな。  
B: あした雨だジェ。[渋谷2008:  
(16)]
- (10) 太郎、今回、数学100点取ったバ。[渋  
谷2004: (23)]
- (11) 明日雨だズ。(平叙文) [渋谷2000:  
(8)]
- (12) いつ言ったズ。(疑問文) [同: (10)]
- (13) 早く行けズ。(命令文) [同(12)]
- (14) あしたぐらい 雪降るハ一。(平叙  
文) [渋谷1999a: (6)]
- (15) あした帰ンノガハ一? (疑問文)  
[同: (8)]
- (16) あした行ゲハ一。(命令文) [同:  
(9)]

表1が示すように、富山市方言・山形市方言では平叙文・疑問文・命令文それぞれに専用の終助詞が発達している。共通語では、平叙文専用の終助詞はあるが、位相(ジェンダーや待遇価)に偏りがある。疑問文のカも非丁寧体では同様の偏りがあり、命令文専用の終助詞はない。

汎用のヨやネがジェンダーや待遇価を問わない形として頻用され、疑問文では上昇調という韻律的手段が疑問の意を補う。

形式の異同に注目すると、疑問文のカ(山形市方言はガ)は3変種に共通だが、平叙文・命令文では変種間の違いが大きい。対して、汎用の終助詞ヨとナ行系(ネ・ナ)は3変種に共通する。山形市方言ではさらに固有の汎用的な終助詞ズやハが発達している点が特徴的である。

文タイプの専用・汎用性は終助詞の相互承接や間投助詞用法の有無と関わる。汎用の終助詞は、特定の文タイプ専用の終助詞より文末に位置する傾向、また、間投助詞用法を併せ持つ傾向がある。

共通語の終助詞は、承接から{カ・サ・ワ・ゾ・ゼ}{ヨ・イ}{ネ・ナ}の3群に分かれる(渡辺1968、田野村1990)。平叙文専用のワ、疑問文専用のカより汎用のヨ・ネが後に位置し、ワのみが「ワ+ヨ+ネ」という3つの連続を許す。

- (17) a. 行く{わ/か}。  
b. 行く{わよ/かよ/よ}。  
c. 行く{わよね/?かよね/よね/ね}。

間投助詞の用法を持つのは文タイプにお

いて汎用のサ、ヨ、ネ、ナである。

富山市方言では、「平叙チャ・ワ＋汎用ヨ＋汎用ノ・ネ」という承接が可能<sup>4)</sup>。共通語の「ワ＋ヨ＋ネ」と同様の構造と言える。「疑問カ・ケ＋ヨ」は可だが「カ・ケ＋ヨ＋ノ・ネ」は許容しにくい点も共通語と似る。命令文専用のマもヨ、ヨ＋ノの後接が可(やは不可)。総じて、富山市方言でも特定の文タイプ専用の終助詞より汎用の終助詞が後に位置する。

(18) a. イク {チャ／ワ／カ／ケ}。

b. イク {チャヨ／ワヨ／カヨ／ケヨ／ヨ}。

c. イク {チャヨノ／ワヨノ／??カヨノ／??ケヨノ／ヨノ／ノ}。

(19) a. イケマ。

b. イケ {マヨ／ヨ}。

c. イケ {マヨノ／ヨノ}。

また、富山市方言で間投助詞用法を持つのは汎用のヨ、イネ、ノ、ネ、ナである。

渋谷 (2016) は、山形市方言の平叙文の文末詞は、①テンス・エビデンシャル等を表すケ、②判断とのつながりをもち、平叙文にのみ使用されるベ・ガ (判断不確定系)、ジェ・バ・ドレ・モ (判断確定系)、③判断と聞き手への伝え方の両者に関わる汎用のズ・ヨ、④もっぱら聞き手への伝え方に関わる汎用のネ・ナ、ハ、⑤聞き手への待遇のあり方を示す汎用のス、と分けられ、おおよその順で承接するとする<sup>5)</sup>。やはり汎用の終助詞が平叙文専用の文末詞よりも後に位置している。また、汎用の終助詞ヨ、ハ、ス、ネ、ナが間投助詞用法を持つ (ただしネとナの間投助詞用法は共通語的または稀)。

文タイプの専用・汎用性が相互承接と相関するということは、特定の文タイプ

に専用の終助詞は話し手の事態に対する捉えかたを表し、汎用の語はそれをどう言い表すか・伝達するかを表すことによる<sup>6)</sup>。汎用の語が間投助詞用法を持つのも、間投助詞が伝達を担うことに合致する。

### 3. 平叙文専用の終助詞：富山市方言のゼ・ジャと山形市方言のジェ・バ

前述したように、文タイプ専用の終助詞は話し手の事態に対する捉えかた、すなわち事態認識のモダリティを表す。表1では平叙文専用の終助詞の種類における方言差を見たが、終助詞が表すモーダルな意味においてはどのような方言間の異同があるだろうか。本節はこの観点での事例研究として、富山市方言のゼ・ジャと山形市方言のジェ・バをとりあげる。

渋谷 (2004, 2008, 2016, 私信) による山形市方言のジェ・バの例は、それぞれ富山市方言のゼ・ジャに置き換えることができる。(20)～(22)がジェ・ゼ、(23)～(25)がバ・ジャの例。

(20) A: あした、釣りにでも行こうかな。

B: あした雨だジェ／雨だゼ。[渋谷2008: (16)]

(21) おまえ、珍しい人が来るから待ってろと言ったけど、誰も来ネケジェ／コンカツタゼ (来なかったよ)。[渋谷2008: (20)]

(22) A: 鉛筆がないんだよ。

B: そこに絶対あるから探してみろ。

A: いいや、いくら探してもないジェ／ナイゼ。[渋谷私信]

(23) 太郎、今回、数学100点取ったバ。／  
トッタジャ。[渋谷2004: (23)]

(24) 10年前に行ったときに見つけたん  
だけど、あそこの海岸はウニの宝庫だ  
バ／宝庫ダジャ。[渋谷2004: (31)]

(25) A: [料理をしながら]よし、できた。  
B: あなた、まだ塩を入れていない  
バ／イレトランジャ。[渋谷私  
信]

山形市方言のジェとバ、富山市方言の  
ゼとジャは、いずれも平叙文専用<sup>7)</sup>。後  
述のように、複数の事態間の矛盾に対す  
る話し手の認識を表す点で、意味的にも  
共通する。ただし、ジェ・バにはネ・ナ・  
ハ・ス(2節の④⑤)が後接可能だが、富  
山市方言のゼ・ジャは他の終助詞を後接  
しない。音調面では、山形市方言のジェ  
が、先行拍より低く付くか(無標)、先行  
拍より高く付きジェの拍内で大きく下降  
する(有標)のに対し、富山市方言のゼは  
低く付く点は共通するが、ゼ自体は上昇  
することが多い(非上昇も可)。バとジャ  
は下降調をとる点で共通する<sup>8)</sup>。

前述のように、山形市方言のジェの例  
はすべて富山市方言のゼに、バの例はす  
べてジャに置換可能である<sup>9)</sup>。大きな違  
いとして、ジェ・バは聞き手に伝達する  
形であり、独話では不可<sup>10)</sup>、富山市方言  
のゼ・ジャは独話でも可という点があ  
る。

(26) [AとBが「あしたは釣りに行こ  
う」と話しているのを聞き、独話で]  
アシタ 雨ダゼ。(明日は雨だぞ。)[cf.  
(20)]

(27) [人が来るから待っているとわれ  
て従ったが、誰も来なかった。独話で]  
結局 誰も コンカッタゼ。(結局誰も来

なかったじゃないか。)[cf. (21)]

(28) [答案を見て独話で] ワ、太郎 数学  
100点 トッタジャ。(わあ、太郎が数学  
で100点とったぞ。)[cf. (23)]

(29) [料理をしているAが「よし、でき  
た」と言うのを聞いて、独話で] マダ  
塩 イレトランジャ。(まだ塩を入れて  
いないぞ。)[cf. (25)]

井上(1995a, 1998, 2006)によるゼ・  
ジャの意味を(30)、渋谷(2004, 2008)  
によるジェ・バの意味を(31)に示す。

(30) ゼ:「当該の情報と別の情報との間  
の矛盾・摩擦を発話時において認識し  
ている」という話し手の心的態度を表  
す。

ジャ:現場の状況や記憶を参照した結  
果、話し手のそれまでの認識の更新を  
せまるような結論pがその場で自然と  
意識にのぼり、話し手がpという線で  
認識を更新する必要性を感じている  
(非主體的な認識更新)という話し手  
の心的態度を表す。

(31) ジェ: [[命題] + ジェ]のなかの[命  
題]で示される知識や情報が、聞き手  
が誤って認識しているものとは異なる  
正しい知識や情報であるとして、聞き  
手に提示する。

バ: 当該情報は、話し手が意外性をも  
って見出した／認識したもので、(話  
し手にとっては驚きなのだから)聞き  
手にとってもおそらく、聞き手の想定  
にはない／聞き手の想定とは異なる、  
聞き手が驚くにちがいない情報であ  
るとして伝達する。

ゼとジェは、主節が表す事態(「当該の  
情報」「[命題]で示される知識や情報」)  
と別の事態との間に矛盾があるという話

し手の認識を表す点で共通する。ただし、ジェは、そうした話し手の認識を聞き手に伝達する場合にのみ用いられる。また、ジャとバは、当該事態が話し手にとって認識更新をせまるもの(「当該情報は、話し手が意外性をもって見出した／認識したもの」)という点で共通するが、山形市方言のバは、ジェと同じく、聞き手への伝達のために用いられる。こうした先行研究の記述から、小西(2016b)は、富山市方言のゼ・ジャと山形市方言のジェ・バの違いを、対聞き手性(聞き手への伝達性)の有無に置いた。しかし、それとは独立した違いも見出せる。

まず、富山市方言のゼと山形市方言のジャについて見よう。富山市方言のゼは、(30)が示すように、話し手が経験する〈現実の事態〉と、それ以前から持つ〈既成の認識〉との間に矛盾があるという話し手の認識を表す。そしてゼは、〈現実の事態〉を表す節にも、〈既成の認識〉を表す節にも付く(井上1995aも明記)。(32)(33)(35)の1文めや(34a)は〈現実の事態〉、(32)(33)(35)の2文めと(34b)は〈既成の知識〉を表す節にゼが付く例である<sup>11)</sup>。(34b)が許容しにくいのは聞き手自身に関わることを〈既成の認識〉として述べるという語用論的な理由によるもので、第3者の服装についての(35)では問題ない。

(32) [AとBが「あしたは釣りに行こう」と話しているのを聞いて、Cに／独話で] A ラチ アシタ 釣りニ イク ユートルゼ。アシタ 雨ダゼ。(A達が明日釣りに行くと言っているぞ。明日は雨だぞ。)[cf. (20)(26)]

(33) アレ? 鉛筆 ナイゼ。サッキマデ コ

コニ アッタガダゼ。(あれ? 鉛筆がないぞ。さっきまでここにあったんだぞ。)[井上1995a: (11)改、cf. (22)]

(34) a. アンタ イー 服 着トルゼ。(あなた、いい服を着ているじゃないか。)[井上1995a: (24)改]

b. ??アンタ イツモ ソンナ イー 服 着ンガダゼ。(??あなたは、いつもそんないい服を着ないんだぞ。)

(35) [花子に] 太郎 イー 服 着トルゼ。イツモ アンナ 服 着ンガダゼ。(太郎はいい服を着ているじゃないか。いつもはあんな服は着ないんだぞ。)

一方、山形市方言のジェの付く節が表すのは、「聞き手が誤って認識しているものとは異なる正しい知識や情報」(31)である。〈現実の事態〉〈既成の認識〉の区別にあてはめれば、ジェは〈既成の認識〉を表す節にのみ付き<sup>12)</sup>、〈現実の事態〉にあたるのは聞き手の言動ということになる。ただしジェは、次のように、ネを伴って、別の相手に〈既成の認識〉を伝達することもできる(渋谷、私信)。

(36) [AとBが「あしたは釣りに行こう」と話しているのを聞き、Cに] 明日 雨ダジェネ。[cf. (20)(26)]

(36)のような場合も含めると、ジェの用法において〈現実の事態〉にあたるのは、聞き手や聞き手以外の他者の言動であり、それ(またはそれから推論される〈聞き手や他者の認識〉)が話し手の〈既成の認識〉と矛盾するとき、〈既成の認識〉を正しい情報として聞き手に伝達すると言える。例えば(37)では〈現実の事態=明日Aが釣りに行こうとしている〉が、〈聞き手の認識=明日は釣りに適している〉を含意し、それが〈既成の認識=伝達内

容＝明日は雨だ」に矛盾する<sup>13)</sup>。

(37) A：あした、釣りにでも行こうかな。

B：あした雨だジェ。[=(20)]

以上のように、山形市方言のジェの用法は富山市方言のぜの用法の部分集合である。ジェは聞き手を要し、かつ、話し手にとっての〈既成の認識〉を表す節にのみ付くという点で、ぜよりも用法が狭い。両者の用法の範囲を図1に、また、図の①～④に対応する例を(38)に示す。

(38) A：あした、釣りにでも行こうかな。

B：① [A (またはC) に] あした 雨だ\_\_。

② [独話で] あした 雨だ\_\_。

③ [A (またはC) に] おまえ (Aが) あした釣りに行くなんて言っている\_\_。

④ [独話で] Aがあした釣りに行くなんて言っている\_\_。

上の①～④の区別が示すように、対聞き手性と主節の事態の違いとは論理的に独立する。ただし一般に独話(②④)は稀であり、また、聞き手に属す〈現実の事態〉について聞き手に伝える発話(③で聞き手がA)は、聞き手にとって情報価値が

低い点で語用論的な原則から外れる。Aの言動についてその場でCに伝える発話(③で聞き手がC)も稀だろう。つまり、山形市方言のジェの、対聞き手性と〈既成の認識〉を表す節にのみ付くという特性との結びつきは、語用論的な動機に支えられていると言える。言い換えれば、ジェの意味は、①～④のうち、発話の典型である①に特化している<sup>14)</sup>。一方、富山市方言のぜは、聞き手への伝達という要素をそれ自体の意味として含まないが、語用論的には可能である。また、聞き手自身についての情報を伝え、特別な語用論的效果((38)③であれば揶揄)を持たせる発話も可能である。

富山市方言のジャと山形市方言のバの関係は、ぜとジェの関係と相同的である。4形式の異同を明確にするため、ジャの意味を次のように改める。

(39) 現場の状況や記憶を参照した結果、話し手の〈既成の認識〉とは矛盾する〈現実の事態〉が自然と意識にのぼり、話し手が認識を更新する必要性を感じているという話し手の心的態度を表す。[(30)「ジャ」改]

|       | 主節の表す事態 |         |
|-------|---------|---------|
|       | 〈既成の認識〉 | 〈現実の事態〉 |
| 対聞き手+ | ①       | ③       |
| 対聞き手- | ②       | ④       |

⋯⋯ 山形市方言のジェの用法  
 □ 富山市方言のぜの用法

図1. 山形市方言のジェと富山市方言のぜの用法の範囲

|       | 主節の表す事態 |         |
|-------|---------|---------|
|       | 〈現実の事態〉 | 〈既成の認識〉 |
| 対聞き手+ | ①       | ③       |
| 対聞き手- | ②       | ④       |

⋯⋯ 山形市方言のバの用法  
 □ 富山市方言のジャの用法

図2. 山形市方言のバと富山市方言のジャの用法の範囲



富山市方言のジャは、発話時に認識した〈現実の認識〉を表す節にも、それに矛盾する〈既成の認識〉を表す節にも付く<sup>15)</sup>。ただし後者は、「～と思っていたなかった」「～とは意外だ」など認識・評価のモダリティを伴い全体で〈既成の認識〉を表すか、「～と思っていた」など「〈既成の認識〉+モダリティ形式」となる。下の(40)では、aが〈現実の事態〉、b、b'が〈既成の認識〉を表す場合に当たる。

(40) [太郎の答案を見て]

a. 太郎 数学 100点 トッタジャ。(太郎が数学で100点とったぞ。)[≡(23)]

b. 太郎 コイ 数学 デキルチャ ビックリシタジャ。(太郎がこんなに数学ができるとはびっくりしたよ。)

b'. 太郎 数学 苦手ダ 思トッタジャ。(太郎は数学が苦手だと思ってたよ。)

渋谷(2004)によると山形市方言のバは「話し手が意外性をもって見出した／認識した情報」を表す節に付き、聞き手にも意外だろうとの想定でその内容を伝達する形である。〈現実の事態〉を表す節のみに付くと言える<sup>16)</sup>。

バとジャの用法の範囲を図2に、①～④に対応する例を(41)に示す。

(41) [太郎の答案を見て]

① [花子に] おい、太郎が数学で100点とった\_\_。

② [独話で] わあ、太郎が数学で100点とった\_\_。

③ [花子に答案を見せながら] 太郎は数学が苦手だと思っていた\_\_。

④ [答案を見ながら独話で] 太郎は数学が苦手だと思っていた\_\_。

この場合も、対聞き手性と主節事態の性質の違いは独立する。ただし、前述の

とおり独話はそもそも稀であり、また、〈既成の認識〉の否定が〈現実の事態〉の具体を含意するとは限らず(例えば『太郎は数学が苦手だ』と思っていたが否定された」と伝えることは「太郎が100点をとった」を含意しない)、含意したとしても聞き手の処理コストが高い発話となる。山形市方言のバにおける、対聞き手性と〈現実の事態〉を表す節にのみ付くという特性との結びつきは、語用論的な動機に支えられていると言える。

#### 4. 課題と展望

終助詞の種類と体系、個々の終助詞の意味・用法について、共通語と2つの方言間の異同を見てきた。

2節で見たような文タイプごとの終助詞の整理は、終助詞の体系における方言間の異同の把握に有効である。ただし本稿では3つの文タイプに限って概観したに過ぎず、相互承接については文タイプの専用性との相関から簡単に触れたのみである。相互承接については、共通語についての田野村(1990,1994)の枠組みを渋谷(2016)が発展させている。これを援用した他方言の記述と方言間対照が今後の課題となる。

3節では、平叙文専用で、事態間の矛盾に対する話し手の認識を表すという点で共通する2方言×2形式を対象に、意味・用法の対照を行った。観点や用語の共通性・透明性を高め、他方言話者に理解しやすい記述を試みた。他の方言・形式にもこの方向で対照を進め、終助詞が担う意味の範囲の全体にせまりたい。

上の2点に関連して、任意の言語変種において終助詞は意味的な体系を構成す

るのかという問題がある。特に、構造（承接）上、対立的（選択的）関係にある終助詞どうしが、意味的にも対立関係を成すのかという問題である。富山市方言の平叙文専用の終助詞では、ゼとジャ、チャとワをそれぞれ意味的に対立関係にあると捉えられるが（井上2017）、渋谷（2016）は山形市方言のジェとバの意味的な対立関係を認めず、むしろ体系性がないことに新たな終助詞の発達の可能性を見る。だが、3節で見たように、富山市方言ゼと山形市方言ジャの関係、富山市方言ジャと山形市方言バの関係は相同的である。ジャとバには、厳密な対立関係とまでいかずとも、対聞き手性、および、事態間の矛盾に対する認識を表す点で類義性が認められる。また、対聞き手性や主節事態の性質からみると、富山市方言、山形市方言それぞれに一貫性があり、このような終助詞の意味・用法の差の基盤に、それぞれの方言の表現志向とでもいうべきものがありそうに思われる。

### 注

- 1) 当該方言話者以外にも理解できるよう用法を具体的に示すなどの工夫に伴う、負の側面と言える。
- 2) この2方言を選ぶのは前述の井上や渋谷および筆者の成果（小西2016a）、筆者の富山市方言話者としての内省を利用することによる。
- 3) 小西（2016b）表2を修正。共通語は田野村（1990, 1994）、丹羽（2005: 8-9章）、日本語記述文法研究会（2003）、山形市方言は渋谷の記述（1999a, 2012, 2016等）、富山市方言は小西（2016a: 167-179）、井上の砺波方言の記述（1995a, 1995b等）を参照。ここでは文タイプとして平叙・疑問・命令のみ区別し、意志など他のタイプは略す。命令文専用の終助詞とするのは「書け」「書いて」といった行為指示専用形に付く形で、「書かないか」など派生的命令表現に付く形は含めない。渋谷（2016）は理由節などにも現れるケ・ベも文末詞とするがここでは除く。また渋谷（2016）は納得を表す「そうか」等を平叙文とするが、ここでは疑問文の周辺用法とみなし、力（ガ）を疑問文専用とする。終助詞や文タイプの認定に伴う問題は他にもあるが略す。
- 4) 汎用のイネを含む「ワ+イネ+ヨ+{ノ/ネ}」も可能。ただしイネはヨと意味が重なり、イネ、ヨ、イネ+ヨの間にはヨがイネよりもぞんざいで、イネやヨ単独よりイネ+ヨのほうが聞き手に強く情報受容を求めるぐらいの違いしか見出せない。また、「ワ+イネ+{ノ/ネ}」は不可（イネはヨを介しないとノ・ネと接続できない）。小西（2016: 172-173）はワイネを一つの終助詞相当としている。
- 5) 最大7形式（ケ+ベ+ガ+ズ+ネ+ッス+ハ）の承接が可能とのこと。ただし①ケと②ベは従属節でも現れる形で表1では除外（注3参照）。
- 6) 渋谷（2016）は山形市方言の①～⑤の承接について、①側は「命題目当て性」、⑤側は「表出性」が大とする。
- 7) 井上（1998, 私信）によると富山県砺波（井波）方言では「アノ人 誰ヤッタジャ（あの人は誰だったろう?）」など、思い出しの疑問詞疑問文でジャが可能だが、富山市方言話者としての小西の



内省では許容しにくく、本稿では平叙文専用とする。他の点で砺波方言と富山市方言のゼ・ジャに違いは見られない。富山県内にはコピュラのジャもあるが、井上(1998)も記すように終助詞ジャとは明確に区別できる。

- 8) 富山市のゼ・ジャの音調については小西(2016a: 168-169, 232-238)参照。
- 9) 小西(2016b)は「あのまんじゅうはさっきあんたが食べてたケジェ」(渋谷2008: (21))でゼが許容しにくいとしたが、聞き手が饅頭を食べたことを思い出さない様子にあきれて非難する発話であれば、ゼも可能である。
- 10) 渋谷(私信)により山形市方言で(26)(27)でジェ、(29)でバが不可だということを確認した。それぞれ「雨ナンダゲントナ(雨なのになあ)」「来ネドレ(来ないじゃないか)」「イッデネドレ(入れてないじゃないか)」となる(ドレについては渋谷2001参照)。
- 11) <既成の知識>を表す節にゼが付く場合、「～ガダ・ガヤ」(のだ)となることが多いが、そうとは限らない。
- 12) 渋谷(私信)により、(33)の1文め、(34a)でジェが不可なことを確認している。それぞれ「ナイ(ない)／ナグナタ(なくなった)」(終助詞Ø)、「着テルナー」と言うとのこと。
- 13) [靴を履いているAに]「その靴、おれのだジェ」(渋谷2008: (21); 富山市方言のゼも可)など、<現実の事態>が非言語情報の場合、話し手が認知する<現実の事態>(Aが私の靴を履いている)が<既成の認識>(Aの履いている靴は私のだ)を包含し、二つの区別が中和される。山形市方言ではこの文脈

で「おまえ、俺の靴をハイッダジェ(履いているぞ)。」との文も可であり(渋谷、私信)、<現実の事態>と捉えうる節にジェが付いていると言える。

- 14) ジェとゼは形が似ており(ゼ[dze]が口蓋化すればジェ[dʒe])同源であろう。用法の通時的関係は、ゼ>ジェ(典型に収斂する方向への変化)、ジェ>ゼ(典型から拡張する方向への変化)のどちらも考えられる。なお、大阪方言のデも同源と思われ(安井寿枝氏の教示)、用法の対照が課題となる。
- 15) 井上(1998)の例はすべて前者だが、後者も砺波方言で可(井上、私信)。
- 16) 渋谷(私信)によると(40b, b')や類例でバ不可。(40b, b')はそれぞれ「ビックリシタ(終助詞Ø)」「思ッタケ(ノニ)」「思っていた(のに)」となる。

#### 参考文献

- 井上優(1995a)「富山県砺波方言の終助詞「ゼ」の意味分析」『東北大学言語学論集』4, 11-21.
- 井上優(1995b)「方言終助詞の意味分析：富山県砺波方言の「ヤ／マ」「チャ／ワ」」『国立国語研究所研究報告集』16, 161-184.
- 井上優(1998)「富山県砺波方言の終助詞「ジャ」の意味記述」『日本語科学』4, 122-134.
- 井上優(2006)「モダリティ」『シリーズ方言学2 方言の文法』137-179, 岩波書店
- 井上優(2017)「終助詞の意味の体系性に関する試論：富山県井波方言の場合」『言語と文明』15, 101-112.
- 小西いずみ(2016a)『富山県方言の文法』

- ひつじ書房
- 小西いずみ (2016b) 「対照方言学的研究のこれまでとこれから」 日本方言研究会編『方言の研究 2』99-115, ひつじ書房
- 小林隆 (2004) 『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房
- 渋谷勝己 (1999a) 「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1, 6-15.
- 渋谷勝己 (1999b) 「文末詞「ケ」: 三つの体系における対照研究」近代語学会編『近代語研究 第十集』205-230, 武蔵野書院
- 渋谷勝己 (2000) 「山形市方言における文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』2, 8-17.
- 渋谷勝己 (2001) 「山形市方言における確認要求表現とその周辺」『阪大社会言語学研究ノート』3, 20-32.
- 渋谷勝己 (2004) 「山形市方言の文末詞バ: ヨと対比して」『阪大社会言語学研究ノート』6, 170-180.
- 渋谷勝己 (2008) 「山形市方言の文末詞ジェ: ヨ・ズ・バと対比して」『阪大社会言語学研究ノート』8, 1-13.
- 渋谷勝己 (2012) 「山形市方言の文末詞ヤ: ヨと対比して」『阪大社会言語学研究ノート』10, 78-88.
- 渋谷勝己 (2014) 「方言研究と通言語的研究」定延利之編『日本語学と通言語的研究との対話: テンス・アスペクト・ムード研究を通して』97-145, くろしお出版
- 渋谷勝己 (2016) 「山形市方言の文末詞の相互承接」『阪大日本語研究』28, 1-21.
- 田野村忠温 (1990) 「終助詞」『現代日本語の文法 I: 「のだ」の意味と用法』143-150, 和泉書院
- 田野村忠温 (1994) 「終助詞の文法: 江戸語資料に見る終助詞の体系性」『日本語学』13-4, 94-112.
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 丹羽一彌 (2005) 『日本語動詞述語の構造』笠間書院
- 松丸真大 (2006) 「方言における確認要求表現の対照研究にむけて」中井精一・ダニエル ロング・松田謙次郎編『日本のフィールド言語学』273-286, 桂書房
- 渡辺実 (1968) 「終助詞の文法論的位置: 叙述と陳述再説」『国語学』72, 127-135.

#### 付記

本研究はJSPS科研費JP17K02777, JP26244024, JP17K02801の助成を受けている。本稿は愛知学院大学人間文化研究所研究会 (2019年2月)、第56回表現学会全国大会シンポジウムで発表した内容にもとづく。両会の参加者から有益なコメントを頂き、また、井上優・渋谷勝己の両氏からそれぞれの方言の終助詞の文法性判断や本稿の内容に対するコメントを頂いた。感謝申し上げる。

(広島大学)